

<研究ノート>

大和市 M 地区から見る神奈川県県央地域の エスノサバールとしての一位相

—結節点の社会的世界と地域のエスニシティ経験に照準して—*

藤代将人

Aspect of the Ethno Suburb in Central Part of Kanagawa Prefecture from the M district of Yamato City

—Aim at Social World of Nodal Point and Ethnic Experience of the Community—

FUJISHIRO, Masahito

要旨：神奈川県県央地域にはエスニック関連施設が集積しているが、郊外におけるこのような地域を何と呼べばよいのか。本研究では、リ・ウェイ (Li Wei) の概念に示唆を受け (Li 2011)、神奈川県県央地域全体を一種の「エスノサバール」と仮定する。エスノサバールはいくつかのマルチエスニック・ネイバーフッドから構成されると筆者は考えるが (Alba 1997: 883-903)、本論では、マルチエスニック・ネイバーフッドの一つである大和市 M 地区をフィールドに、「結節点」としてのエスニック施設を対象として、そこに形成されるマルチエスニックな社会的世界の一端と、その世界を支える地域のエスニシティ経験に焦点を合わせ報告する。本論ではいくつかの「結節点」の社会的世界について描くが、外国籍住民にとって、「結節点」としてのエスニック施設は母語で交流でき、必要な情報が得られ、日本でのストレスや家族の問題について相談できる場所でもあり、コミュニティセンターとしての役割を担っている。M 地区の場合の特徴は、「マルチエスニック性の高さ」である。また、マルチエスニック性と並んで「寛容性」の高さもあげられる。それはこの地区の周囲に難民定住促進センターや厚木基地の存在があったことも大きい。それが地域としてのエスニック経験を積み重ね、そのことが異質性に対する「寛容性」を生み出したと筆者は考える。

キーワード：エスニックサバール、結節点、マルチエスニック性、寛容性、地域のエスニシティ経験

1. 本研究の意図

2016年1月1日現在、神奈川県には17万4427人の外国人が生活しており、中国、韓国・朝鮮、フィリピン、ベトナム、ブラジル、ペルーの順で多い (表1)。神奈川県内の外国人の動向に関しては、これまで主に横浜市や川崎市にて調査が行われ、多くの研究蓄積があるものの (広田1997; 2003、宮島2000、鐘ヶ江2001、神奈川大学人文学研究所2008)、外国人が比較的多いにもかかわらず、県央地域 (厚木市、大和市、海老名市、座間市、相模原市、綾瀬市、愛川町を含む地域) についてはその実態がほとんど知られていない。

例えば、県央地域の一つのエスニック拠点としての厚木市には外国人5,880人が暮らしている。1968年の東名高速道路厚木インターチェンジの開設により、産業経済が著しく発展し、急速な都市化の進展に伴い、都市基盤の整備が進んだ。その結果、人口も増え続け、国の施策の中でも、業務核都市に位置づけられるとともに、2002

年には特例市として発展した。現在の本厚木駅周辺はデパートや飲食関連の店舗が密集する繁華街となっており、近年では、IT 関連企業で働くインド人も多く、フィリピン人の若者も頻繁に目にする。駅周辺のビルには、ペルーレストランや日本語教室などが入り、徒歩圏内には、ペルー雑貨店も存在している。厚木市には国際交流協会はないものの、インターナショナルサロンの開催や母国語による外国人相談を実施するなど市役所が積極的に国際化事業に取り組んでいる¹⁾。また、例えば、県営綾瀬 T 団地には多くの外国人が暮らしており、団地周辺にはタイの食材店やブラジル雑貨・レストランが営業している。さらに、南米の若者たちが集まるラテンクラブ (ダンスホール) D がある。米軍基地入り口からすぐのところにあるこの店は大変目立たない場所にあるが、多くのラティーノが出入りすることでそれとわかる。

以上のように、大都市圏郊外に位置し、多様なエスニシティ、関連の企業、エスニック・レストラン、エスニック雑貨店等々が集まる県央地域をどのように呼べばよいのか。

表1：神奈川県内の主な市町村別主要国別外国人数（2016年）

	合計	中国	韓国・朝鮮	フィリピン	ベトナム	ブラジル	ペルー	タイ	インド
神奈川県	174427	57103	29165	19053	10852	7699	6184	3957	3725
横浜市	81423	33621	13670	6884	3714	2291	1233	1504	1960
川崎市	32991	11326	7826	3849	1734	727	465	574	814
相模原市	11449	3654	1726	1715	645	302	274	305	236
横須賀市	4929	737	921	1314	169	172	303	103	15
平塚市	4320	716	394	755	233	654	182	109	29
藤沢市	5356	944	944	379	432	559	553	168	44
秦野市	2978	471	205	176	422	421	387	94	29
厚木市	5880	1113	478	631	1060	385	637	167	217
大和市	5848	1256	815	763	676	289	699	201	29
海老名市	2193	382	254	199	238	167	115	86	189
座間市	2429	577	310	393	177	120	130	76	36
綾瀬市	2953	205	178	223	548	555	210	174	6
愛川町	2168	169	35	303	61	450	673	104	4

神奈川県県民局くらし県民部国際課のデータをもとに筆者が作成

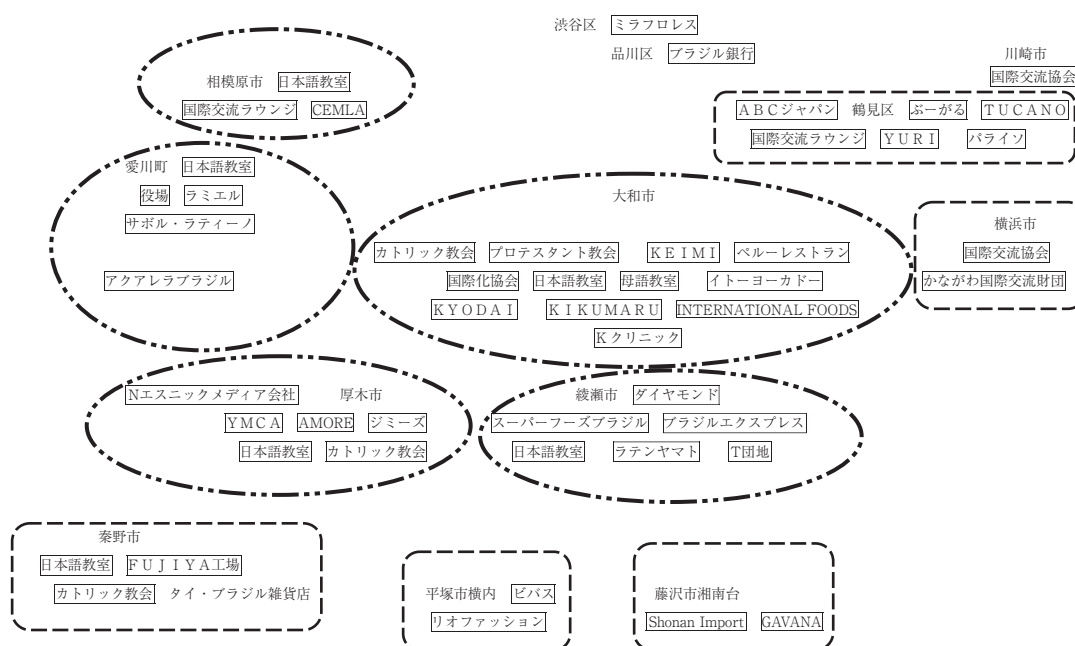


図1 神奈川県県央地域における主なエスニック関連施設（抜粋）
作成：筆者

アメリカの地理学者リ・ウェイはロサンゼルス大都市圏の中にできた、こうしたエスニックな地域を「エスノバーブ (Ethnoburb)」という概念で表現している。「エスノバーブ」とは、大都市圏郊外のエスニック地域 (エスノサバーブ) をリ・ウェイなりに表現した造語であるが、彼女はこのエスノバーブ (=エスノサバーブ) の特徴を①都市中心部のオールド・エスニック・タウンから枝分かれしたそれというよりは、グローバル化の進展によって新たなエスニック・ビジネスとも結びつき、

特に郊外に展開し、②必然的に同一民族のエスニック・タウンとしてよりもマルチエスニック性を帯び、③伝統的なチャイナタウンと比べて、若く、学歴が高く、ホワイトカラー層のニューカマーが多く、単身者でなく家族形態をとる人が多い。④トランスナショナルな結びつきを持った人々で構成され、⑤そこでのエスニック・ビジネスもエンクレーブ・エコノミー (エスニック・タウンの中で完結する経済活動) とは異なり、国内外のビジネス活動と結びつくものと定義している (Li 1997 ;

1998)。

本研究では、リ・ウェイの概念に示唆を受け、神奈川県県央地域を一種の「エスノサバール」と仮定し、特にそれを構成するマルチエスニック・ネイバーフッドの一つの核である大和市 M 地区に焦点を合わせてそのマルチエスニック性と、地域全体のエスニシティ経験の基層と結びつけながら、同地区の社会的世界について報告しその特徴を考察したい(図 1: 神奈川県県央地域における主なエスニック関連施設参照)。

2. 調査地域の概要と調査方法

2.1 大和市 M 地区の概要

神奈川県大和市には、2016年1月現在5,848人の外国人が生活し、大和市人口の約2.5%を占め、外国人比率としては、県内では愛川町、綾瀬市に次いで3番目となっている。この地域は市の中部から北部にかけて商店街と住宅地が混在し、多くのエスニック施設があることが特徴である(図1参照)。本市には、厚木基地があることに加えて、1980年から1998年まで大和定住促進センターがM地区に設置されていたことから、ベトナム、ラオス、カンボジア出身の外国人が多く居住していた(3.2で詳述する)。これらの難民を地域で受け入れようと様々な人たちが支援を行うようになったことが、現在のマルチエスニックな状況を作り出した一つの要因と考えられている²⁾。

また、1990年代に入ると、南米からの外国人、とりわけ、ペルー人が増加し、一時は日本国内で最も多くのペルー人が暮らす地域でもあった。現在では、多言語で礼拝を行う教会をはじめ、フィリピン雑貨店、韓国料理店、タイ料理店、インドレストラン、ペルーレストラン、ブラジル居酒屋、ペルー人の送金会社などからなるマルチエスニックな様相を呈している(表2)。大和市では、ボランティアによる日本語教室の他、教会や公益財団法人大和市国際化協会(1994年設立)の多文化共生事業がある。大和市役所も、国際交流指針を策定し、外国人市民を含めたまちづくり施策を実施している。

2.2 視点と方法—「社会的世界」と地域のエスニシティ経験への注目

筆者の調査は「結節点」としてのエスニック施設を対象として、そこに形成されるマルチエスニックな社会的世界の一端を報告すると同時に、そうしたマルチエスニック性を地域のエスニシティ経験と結びつけて考察することにある。ちなみに、ここでいう社会的世界とは、

初期シカゴ学派のモノグラフで使用された概念で(Anderson: 1923=1999-2000)、J. ショート (James F. Short, Jr) によれば、「その人たちが生きるまさにその世界」のことを指す(Short 1971: xxxv)。例えば、P. クレッシー (P. Cressey) は、『タクシーダンスホール』の中の第2部3章で「社会的世界としてのタクシーダンスホール」というタイトルでそれを描いている(Cressey 1932)。

ところで、「結節点」とは何か。広田(2003)はエスニック・ネットワークを結節する点を「結び目」と呼び、横浜市鶴見区潮田や大泉町、新宿等にて、「適応はするが同化しない」移民の実態を記述し、都市社会学的意味を考察した。日本社会に越境移動してきた人々の「エスニシティ経験」とその「異質性認識」が提起する問題の意味の考察を出発点として、彼らの「日常の実践」(Certeau: 1980=1987)と「エスニック・ネットワーク」の生成、さらには、「越境する社会的領域」にいたるまでの考察を行っている。この研究では、外国人が集まるレストラン等の「結び目」の特徴を次の3つにまとめている。それらは、①就業機会・情報の獲得、②法律問題等の生活に関する問題の相互扶助、③アイデンティティの確認である(広田: 1997; 2003、広田・藤原: 1993、藤原: 1996; 1998; 2008; 2010)。筆者が注目する点の第二は、こうした「結節点」を支える地域社会全体のエスニシティ経験である。こうした「結節点」が作り出されるには、それらを支える地域が全体として経験し、そこに埋め込まれてきた多文化、多民族との交渉の経験が必要である。筆者はそれを地域社会的経験の基層として、県央地域のエスノサバールの特徴を描きたい。この発想を手がかりに以下、大和市 M 地区におけるマルチエスニックな外国人の社会的世界の一端を報告していく。

本調査についてももう少し補足をしておきたい。既述のように、本研究が依拠する方法論的立場は初期シカゴ学派が行ったいわゆるエスノグラフィーの方法である。調査の具体的方法としては、「結節点」となる場所や機関へのインタビューが主である。また、同時に各種ドキュメントの収集も並行して行う。

また、当事者の視点から、具体的には、①キーパーソンのライフヒストリーを織り交ぜながら、②そこに集まる人々、③結節点としての役割を探りつつ、実態の一面を描写する。本報告の認識論的立場として、社会を「進行中の過程(society as ongoing process)」とし、社会的世界は日々構築されていくものとみなす。「エスニシ

表2 神奈川県県央地域における主なエスニック関連施設

番号	店名	業種	国籍	開業年	経営者の年代	所在地	備考
1	KEIMI	レストラン	ペルー	2005		大和市 M 地区	
2	KYODAI	送金業	ペルー			大和市 M 地区	
3	KIKUMARU	居酒屋	ブラジル	2014		大和市 M 地区	
4	PERU レストラン	レストラン	ペルー	2016		大和市 M 地区	トルコ料理も提供
5	ミラクル	レストラン	インド	2015		大和市 M 地区	
6	ディーガハウス	レストラン	インド	2015		大和市 M 地区	
7	チャンドラ・スーリア	レストラン	ネパール			大和市 M 地区	
8	慈福園	レストラン	台湾			大和市 M 地区	
9	台湾マッサージ	マッサージ	台湾			大和市 M 地区	
10	品珍酒家	レストラン	中国			大和市 M 地区	
11	鞘宝	レストラン	中国			大和市 M 地区	
12	International Food	輸入食品販売	多国籍	1994	50	大和市 M 地区	
13	オモニ食堂	レストラン	韓国			大和市 M 地区	
14	福栄	レストラン	韓国			大和市 M 地区	
15	Filipine food center	輸入食品販売	フィリピン			大和市 M 地区	
16	VIP	パブ	フィリピン			大和市 M 地区	
17	イサラストア	レストラン	タイ	1998	40	大和市 M 地区	
18	ペンタイ	レストラン	タイ	2002	50	大和市 M 地区	
19	イーサン食堂	レストラン	タイ	1993	60	大和市 M 地区	
20	ワントン	マッサージ	タイ			大和市 M 地区	
21	ウサー	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
22	エディ	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
23	ラムトーン	マッサージ	タイ			大和市 M 地区	
24	ライトーン	マッサージ	タイ			大和市 M 地区	
25	サラパタヤ	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
26	リナ	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
27	ランナー	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
28	サップ	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
29	チャオプラヤー	レストラン	タイ			大和市 M 地区	
30	ダイヤモンド	ディスコ	ペルー			綾瀬市	
31	ラテンヤマト	輸入食品販売	ペルー			綾瀬市	
32	スーパーフーズブラジル	輸入食品販売	ブラジル	1991	50	綾瀬市	
33	ブラジルエクस्प्रेस	レストラン	ブラジル		40	綾瀬市	
34	アクアレブラジル	学校	ブラジル		50	愛川町	
35	ラミエル	カフェ	ペルー	2015		愛川町	
36	サボルラティーノ	輸入食品販売	ブラジル	1998	50	愛川町	
37	ジェイムス	輸入食品販売	ペルー		50	愛川町	
38	AMORE	レストラン	ペルー		40	厚木市	
39	3 ジェイムス	輸入食品販売	ペルー		50	厚木市	
40	N エスニックメディア会社	エスニックメディア	ブラジル		40	厚木市	2016年6月都内に移転
41	ビパス	レストラン	ブラジル			平塚市	
42	GAVANA	レストラン	ペルー			藤沢市	

2016年8月7日筆者調べ

ティ」が、現在の「状況」をどのように定義し、意味づけているのか。現段階で、これらの具体的な聞き取り調査を通じて、その社会的世界をどう生きているのかに焦点をあてたい（広田：2016）。

以下、本論文では、「結節点」1として、Kプロテスタント教会の様相の一端を、「結節点」2としてエスニック雑貨店Iの様子を、そして、「結節点」3としてペルーレストランKの社会的世界について描き、最後に地域社会のエスニシティ経験の基層を描いてみたい。

3. 「結節点」としての諸施設の社会的世界とM地区のエスニシティ経験の地域社会的基層

3.1 「結節点」の社会的世界の一様相

〔結節点の事例1〕Kプロテスタント教会 一家族としての情報の交換とアイデンティティ確認の場としての教会—

小田急線M駅から数分のところにKプロテスタント教会がある。スペイン語礼拝は毎週日曜日の午後3時から行われ、ブラジル人の集会は毎週日曜日の午後4時からポルトガル語で行われる。毎回、スペイン語礼拝には、ペルー人を中心に、アルゼンチン、コロンビア、チリなど大人が約70人、子供50人ほどが参加している（教会関係者の話）。家族での参加が最も多く、単身の若者たちもやってくる。

同じ建物の異なる階では、時間をずらしてポルトガル語の礼拝が開始される。こちらは日系人の夫婦が進行役を務める。この礼拝には日系人家族のほかに、ブラジルの若者たちも多く参加している。スペイン語、ポルトガル語の礼拝の後にはそれぞれ交流会が開催される（教会関係者の話）。

筆者は、どのような人々が教会に通ってきているのかについて2016年の6月に20人程度のペルー人、ブラジル人を中心に若干のインタビューを試みた。以下、参加者の属性の一端についてメモ書きではあるが記していきたい。

① 来日時期

来日時期	1990—1995	1995—2000	2000—2005	2005—現在	NA	合計
ペルー人	7	4	0	0	0	11
ブラジル人	5	3	1	0	0	9
	12	7	1	0	0	20

筆者がインタビューした人々20人の場合、1990年以降に移住してきた日系人とその配偶者等の家族が多かつ

た。滞在が20年以上になる者も少なくなく、40代、50代の親とその子供たちの家族の形態が多かった。

② 教会を訪れる頻度

頻度	毎週	毎月	NA	合計
ペルー人	10	1	0	11
ブラジル人	8	1	0	9
	18	2	0	20

今回の筆者の聞き取りに関する限りでは、毎週、礼拝に参加するために教会を訪れるという家族が多い。目的は当然礼拝が主であるが、同国人との交流を深めるためである。この表には表れていないが、母国でも敬虔なクリスチャンで、来日後も熱心に宗教を信仰し続ける者もいれば、来日後に教会に通うようになった者もいた。

③ 日本語能力

日本語能力	読む	書く	話す	聞く	NA	合計
ペルー人	3	0	3	5	0	11
ブラジル人	1	0	2	6	0	9
	4	0	5	11	0	20

筆者の聞き取りの限りでは、一般的に、彼らの日本語運用能力は、聞くことがよくでき、話すことも少しできるが、読んだり、書いたりすることができないように思われた。家庭では母語の使用が多いが、日本語を使うように努力している家族がいるものの、語彙が増えることがなく、完全な日本語でもないという（インタビュー対象者の話）。

④ 最終学歴

最終学歴	高校卒業	大学卒業	大学院卒業	NA	合計
ペルー人	1	6	0	4	11
ブラジル人	1	6	0	2	9
	2	12	0	6	20

この筆者の聞き取りに関する限りでは、母国で大学を卒業している信者が多く、会計学を専攻した人やエンジニアの勉強をした人、栄養学について学んだ人などが目についた。教会に通う外国人信者の多くは学歴が高いと感じられた。エスノサバールの一つの特徴を表していると思われる。

⑤ エスニックレストランの利用

	まったく行かない	たまに行く	よく行く	NA	合計
ペルー人	6	2	3	0	11
ブラジル人	3	1	5	0	9
	9	3	8	0	20

エスニックレストランについては、女性はほとんど利用せず、男性やカップルが頻度としては週に2回くらい

利用する程度である。一方で、日系ペルー人家族は子供の誕生日などの際に、友人たちや職場の同僚に声をかけて盛大にパーティーを開催するという。そのためのグッズや食材をエスニック雑貨店で購入し、教会で行ったり、エスニックレストランを貸し切りにしたり、あるいは、日本語教室が行われる公共施設を借りたりしている。ちなみに、日本には、お金を稼ぐために来たというよりも「より良い暮らしを求めて」来たという回答もあった。

⑥ エスニックメディアの利用

	まったく みない	たまに みる	よくみる	NA	合計
ペルー人	0	2	9	0	11
ブラジル人	0	3	5	1	9
	0	5	14	1	20

ペルー人の場合、南米出身者を対象としたフリーペーパーの『ラティーナ』や KYODAI に置いてある無料情報誌『メルカド・ラティーノ』を、ブラジル人では、ポルトガル語の無料情報誌『アルタナチーバ』がよく読まれているようである³⁾。なお、筆者のこのインタビュー調査では職業については、女性は化粧品やお弁当の箱詰め、介護職が多く、男性は工場勤務やその他（芸術家）であった。あるペルー人男性は、母国の大学で、会計を学んだものの、日本でそれが活かせないという回答もあった。

筆者は K プロテスタント教会と同地区にある Y カトリック教会にも訪れたがそこでは、毎週日曜日の朝早い時間帯に、約60名ほどのベトナム人信者が集まり、教会内のベンチに座り、情報交換をしていた。人々のほとんどはベトナム語で会話をしているが、時折、日本語も聞こえてくる。

ベトナム人信者のそれぞれが教会の中庭で情報交換をする一方で、礼拝堂では日系人信者たちが神父の話に耳を傾ける。礼拝はすべてポルトガル語で行われ、日本人信者の姿はまったくない。この教会では第1日曜日にスペイン語礼拝が、第2日曜日はベトナム語、第3日曜日はポルトガル語、第4日曜日は英語、そして、第5日曜日にはタガログ語といったように、言語別に礼拝が行われている。ちなみに、日本で見ることができない数少ないペルーの行事（セニョール・デ・ロス・ミラグロス）もこの教会で行われている。「奇跡の主」と呼ばれるこのお祭りは毎年10月に開催され、紫の装束を身につけた参加者たちが神輿を担いで街中を練り歩く。

後述するが（4.1）、教会は比較的学歴の高い人々に

とって、「比較的信頼度の高い」情報拠点としての役割を果たし、また、家族ぐるみで交流できる場所としての役割を果たしている。もちろん、付け加えておくと、教会は家族間の良好な関係性だけではなく、ここに集まる人々の抱えた問題も提示している。例えば、この教会に通っていたペルー人とブラジル人の女子大生（愛川町在住）に関する筆者のインタビュー調査では適応のネガティブな側面も推測される（注4参照）。

〔結節点の事例2〕エスニック雑貨店 I — マルチエスニックなコミュニティを支える場所 —

ここでいうエスニック雑貨店とは、食料品をはじめとした日常の様々な生活用品を扱う比較的小規模な店のことを指す。このような店舗として M 地区にあるのが雑貨店 I である。エスニック雑貨店 I の店先にはフィリピンやブラジル、ペルー、バングラデシュなどの国旗をあしらったデザインが用いられ、大きな字で店名が書かれた看板が目印となる。筆者が訪れた時、レジにはフィリピン人女性とオーナーのパキスタン人男性の姿があった。

この店は最寄りの駅から立地もよく、周囲に多くの外国人が暮らすところに位置している。営業時間は11時から21時までで定休日はない。今年でオープンから22年目になる。店では冷凍加工食品や缶詰、化粧品を販売している。店主によると、スナック類や飲料が最もよく売れるという。店舗の入り口には、イベントや国際電話会社 B のチラシが貼られ、フリーペーパーが積み上げられている。

この店で働く G 氏（ブラジル人、40代 女性）は大和市内に居住し、木曜日、金曜日、日曜日だけこの店でアルバイトをしている。その他の日は介護職として働いている。彼女は8歳の時に両親とブラジルから九州に来て、そこでしばらく生活したことがあり、流暢な日本語を話す。彼女によると、この店の客はタイ、インドネシア、フィリピン、ペルーが多いという。以下、G 氏の眼を通して見たこの店の結節点としての役割と特徴について描きたい。

G 氏によれば、この店を訪れる人々は、10代から70代と幅広く、女性も男性も来店する。国籍もタイ、フィリピン、インドネシア、アメリカ、ペルー、ブラジル、インドと様々である。近所に暮らす外国人客が多いが、近隣の綾瀬市、海老名市、座間市、藤沢市といった市外からもよく訪れるという。特に、隣接する綾瀬市には外国人が居住する団地があり（県営綾瀬 T 団地）、自動車、

電子機器関連の工場があるため、外国人労働者を吸収する労働市場が形成されており、これらの生活圏内にこの店が入っていることから、多くの外国人が店を利用していると G 氏という。南米の客とはポルトガル語で世間話をしたりもするが、アジア系の外国人とは日本語でやり取りをする。レジでは簡単な会話だけで用が足りるため、言葉が通じずに困ったことはないという。

この店には、様々な国籍の外国人が出入りすることから、それだけいろいろな情報が集中することになり、それがこの店の「結節点」としての特徴であるといえる。ウルドゥー語も通じるこの店は、他のエスニック食材店にはないバラエティに富んだ情報のやり取りがされている。例えば、同国人及び他のエスニシティに関する生活情報、知り合いの噂話といった個人情報等がエスニシティの壁を越えてやりとりされるのである。つまり、同国人からの情報だけでなく、例えば、ブラジル人スタッフがフィリピン人男性から聞いた情報であったり、パキスタン人店主がタイ人の主婦から聞いた話であったりという具合である。客が人から聞いた話を店員にし、それがまた他の人へと伝えられていく。この店ではマルチエスニックな商品を扱うことで、マルチエスニックな客が来店し、それに対応するために定員もマルチエスニックな構成となっている。

筆者がインタビュー調査の過程で知り合ったこの店の常連の U.T 氏は、秦野市在住の30代の日系ブラジル人男性である。彼はこのエスニック食材店 I、綾瀬市のブラジルレストラン B を月に2回の頻度で利用している。そして、店員の G 氏と様々な情報の交換をしてから帰ると言う。

U.T 氏は兄と弟の三人兄弟の真ん中で、彼だけが2004年に出稼ぎを目的に来日し、現在は秦野市の工場に勤務している。日本語能力は書く以外は、問題なくできるようになった。仕事が休みの日は、日本人の若者と同じように、渋谷や新宿で買い物をしたり、南米のイベントに参加したり、日本国内を旅行したりしている。母国のブラジルには送金はしておらず、稼いだお金は比較的自由に使うと言う。

U.T 氏の場合、教会にはブラジルでも日本でも通ったことがなく、今後も宗教に関する集まりには参加するつもりはないという。何かわからないことがあったり、困ったときは、会社の人に聞くか、友人に相談することができるため、これまで特に問題を経験したことはない。

SNS をよく利用するのでそこで様々な情報を収集す

るという。したがって、ポルトガル語のエスニックメディアは利用しないという。ブラジル人の友人が多く、頻繁に連絡を取り合っており、例えば、代々木で開催されるブラジルのイベントに遊びに行ったり、六本木のラテンバーに友人たちと遊びに行く。日本に来ている他の南米の外国人と遊ぶこともたまにあるという。会社の日本人とも出かけることがあり、日本の花火大会や各種お祭りにも参加した。来日当初はボランティアが運営する地域の日本語教室に参加したことがあり、そこで親切にしてもらったという。そのときに知り合った日本人と現在も連絡を取っており、自治体が年に一度行う国際交流パーティーにも何度か参加したという。この小さな雑貨店はエスニシティの多様な生活世界の広がりを見せる。筆者に見せてくれる。

[結節点の事例3] ペルーレストラン K —媒介者としてのオーナー—

このレストランのオーナーは日系ペルー人2世の F 氏（60代、男性）である。彼はペルー人の奥さん M 氏（60代、女性）と一緒にレストランを経営している。住まいは海老名市であるが、火曜日の定休日以外は二人とも必ず店にやってくる。F 氏には二人の息子がおり、長男は M 物産で仕事をしており、次男も会社を経営している。F 氏はペルーでは政府の役人をしていたが、経済状況の悪化により、1988年に単身、日本に出稼ぎに来た。日本に来てしばらくは製造業に従事していたが、その後、1997年に家族を呼び寄せ、2005年にペルーレストラン K をオープンさせた。この店をオープンさせるまでには、食料品を卸す仕事もしていた。

この店の客の大半は、近隣から車でやってくる。市内のみならず、近隣の綾瀬市、海老名市、藤沢市からの客も少なくないと言う。客層は20代のカップルから60代の家族と幅広い。労働者の男性の来店が多いが、女性同士の来店もたまにあるという。国籍もペルーのみならず、チリ、ボリビア、コロンビア、アルゼンチン、ブラジル、米軍基地関係者のアメリカ人やメキシコ人の利用もあるという。F 氏は、客と写真を撮ったりした後、客同士を紹介し、フェイスブックや連絡先を交換させるなどして「媒介者」の役割を果たしている。また、大和市で行われる国際イベントにも積極的に出店し、ネットワークを広げている。以下、オーナーの F 氏の眼から見た客層についてもう少し詳しく描いてみたい。

F 氏によると、客の多くは母国で大学を卒業しているが、日本では製造業の仕事をしている人が多いという。

隣接する綾瀬市には、自動車や電子機器関連の中小規模の工場があり、そこで塗装、加工、組み立てに従事している。

滞在期間は20年近くになる人が多いにもかかわらず、家では母語であるスペイン語を話しており、日本語の運用能力は相対的に低いということである。母国での仕事は、営業職や事務職、中には銀行員や公務員もいるという。女性の場合は、教員、店員、美容師だった者がいると言うが、母国でのキャリアが日本では必ずしも活かされていない。

情報の入手方法については、同国の友人や知人からが最も多いが、パソコンを使ってスペイン語サイトのインターネットで調べるということが多いようである。パソコンを所有している人がほとんどで、友人に聞いてわからないときは自ら調べるという。

また、母国への送金について筆者が聞いた範囲では、月に5万円を送金している人もいた。母国との間のやりとりは多いという。母国との連絡には、メールや電話が圧倒的に多い。

この店では、客同士が知り合いになる場合が少なくない。というのも、オーナーのF氏が互いを紹介するからである。この店では、他のテーブルの話に、横のテーブルの客が割り込んだり、席を移動して、輪の中に入っていくことも頻繁に起きる。奥さんのM氏も料理をテーブルに運ぶとそのまま客のいるテーブルに座り話をすることもある。このように、国籍が異なっている、スペイン語を通じて知り合いになりやすい雰囲気があり、F氏やM氏がそのような雰囲気を作り出している様子が窺える。オーナーを媒介としながら、新たなネットワークが生まれているのである。

F氏は仕事の相談を持ちかけられることもある。各種申請手続きを手伝ったり、情報を提供したりもした。この店を訪れる客から信頼されている様子を見て取ることができる。

3.2 大和市 M 地区における地域としてのエスニシティ経験

厚木基地は大和市の南西部に位置し、綾瀬市、海老名市の3市にまたがって所在している。1938年に旧日本海軍が航空基地として定めたことから始まり、1941年には帝都防衛海軍基地として使用が開始された。その後、1945年の終戦により連合軍を構成する米軍に接収され今日に至る。

『大和市史』によると、12歳から18歳までの台湾人少

年工たちが動員され、基地で働いていた。例えば、以下のような台湾人少年工の募集状況に関する記載がある(大和市史1994:486)。

昭和十七年十二月台湾青少年採用の件申継書

昭和十八年四月一日 1000名

昭和十八年十月一日 2000名

昭和十九年四月一日 5000名

『大和市史』ではM地区におけるエスニシティ経験についてはわずかな記載があるにすぎないが、ここで『大和市史』からは見えてこないM地区における地域のエスニシティ経験について、同地区に61年間在住のI・Y氏への筆者のインタビューにしたがってもう少し詳しく分け入ってみたい。

なお、I・Y氏は中央大学法学部を卒業後、昭和42年に法律事務所に就職する。その後、通信教育で教員免許を取得し、大和市内の小学校に転職をした。在職中に、飯田橋にある日仏学院にも通い、その後、フランスのグルノーブルに留学した。2年後、出産するため帰国し、大和難民定住促進センターで働くようになる。現在でも在日カンボジア団体の事務局として活動している。

3-2-1. 1970年代のM地区と米軍基地

I・Y氏によれば、大和市北部に位置する70年代の小田急江ノ島線M駅界隈はまだのどかな風景が広がっていた。現在、マルチエスニックタウン化している西口とは反対の東口には、住宅地が広がり、知識人、芸能人、大学教員、新聞記者、百貨店の役員等々のクラスの人々が居住していたという。そこには海外に駐在していた人や、経済的に余裕がある人が住んでいた。現在も東口は閑静な住宅が立ち並び、すぐ近くにはミッション系S女子学園がある。

一方、大和市南部は米軍基地が立地し、基地建設のために集まった若い台湾人や朝鮮人労働者の住む一画があり、近くの中学校には朝鮮学級もあったという。当時の大和駅周辺には米兵のための飲食店が多く、繁華街となっていた。I・Y氏によれば、当時は飲み屋街や基地で働く日本人、将校の家でハウスメイドとして働く日本人女性も少なくなかったという。北部で暮らす住民からは大和駅周辺はいかがわしい地域としてまなざされていたとI・Y氏は言う。

3-2-2. 大和難民定住促進センターについて

インドシナ難民とは1975年のインドシナ戦争終了以

降、ベトナム、ラオス、カンボジアにおける急速な社会主義化や、政治的な迫害を避け、ボートピープルとして脱出したベトナム人、陸路でメコン川を渡ってタイ領に逃れたラオス人やキャンプに逃れたカンボジア人のことをいう。

当初、日本のインドシナ難民の救援事業の実施に当たっては、日本赤十字社やカリタス・ジャパン、立正佼成会等の宗教団体が運営する収容施設において、人道的立場に基づき積極的な難民援護活動が行われていた。日本政府は1979年に難民への本格的な支援を開始し、定住受け入れを決めるとともに内閣官房にインドシナ難民対策連絡調整会議事務局を設置した。姫路難民定住促進センターの開所後2ヶ月して1980年2月29日に大和難民定住促進センターが開所した。そもそも、M地区にセンターが設置されたきっかけは、横浜司教区が管轄していた土地を提供したことに始まる。カトリック教会のみならず、立正佼成会、天理教や救世軍などもセンターの設置に協力したそうである。他のセンターに比べての特徴としてはすべてのカンボジア難民が大和に入所したことである。総計2,641名（カンボジア1217名、ラオス857名、ベトナム567名）を日本社会に送り出した。

3-2-3. 「寛容性」とエスニシティ経験

センターではベトナム人とラオス人による乱闘騒ぎなども含め、財政的にも困難を抱えたが、民間からの寄付や寄贈、そして、各種ボランティアの申し入れが寄せられ乗り切ったとI・Y氏は言う。例えば、医師からの無料診療の申し込みや、汚水処理業者からの排水処理申し込み、寺院からの墓地無償提供の話、さらに、1980年2月25日付の『朝日新聞』には、大和市議会の保守系無所属議員で構成する新政クラブが市内で街頭募金を行った、市内の少年野球チームが難民救済バザーを開き収益金を寄付したり、大学の教員がフランス語の通訳の手伝いを申し出たり、主婦からは入居者の子供の世話をしたいなどボランティアの申し込みが相次いだとある。

一方、1987年10月24日付の『神奈川新聞』によると、6カ国語を駆使し活躍するカンボジア人難民看護師が紹介されている。1990年1月13日付の『読売新聞』では、地域社会への感謝実践と題して、公園清掃をするセンターの難民たちの様子が掲載され、「奉仕されることに慣れた彼らが奉仕する機会を持った」とある。

M地区にセンターを設置することに対しては、感染症を懸念する大和市医師会からの猛反対があったものの、自治会や近隣の住民からの反対はなく、むしろ、協

力的であったという。それには、事前に「連絡会」を設置し、センターの職員が住民とのコミュニケーションをとる努力をしたことも影響している。この「連絡会」には、大和市職員、難民事業本部長、外務省、文部省、法務省、入国管理局職員らが会議に参加していた。連合自治会（5つの自治会長）とも情報を共有した。地元のS幼稚園がクリスマス会や運動会に難民の子供たちを招待したり、M小学校が「ひまわり学級」を開設し、難民の子どもたちとの交流事業を行った。ちなみに、このときのセンター側の窓口がI・Y氏であった。この出来事が現在の神奈川県の国際教室制度が生まれるきっかけにもなったといわれている。

センターでは、日本語支援と社会適応指導が行われていたが十分ではなかった。そのような事情を知った地域の女性たちが多方面から協力するようになる。それらは、M地区やその周辺の主婦たちが組織するグループ「相模友の会」によるボランティア協力であったり、看護師たちのグループや栄養士たちのグループもセンターに出入りするようになった。また、保母たちのグループが施設での生活でストレスがたまらないようにと学校の体育館でレクリエーションを企画したり、さらには、前述のS学園祭で難民たちが作ったエプロンを販売したりした。近隣には退所直前の難民を家に招いてくれる家庭もあったという。ある宗教団体からの寄付金で「かながわ難民定住援助協会」が設立されたり、市外の相模原市の「葦の会」というボランティア団体の協力もあり、センターは様々な形で大和市M地区に多文化経験の種を撒き続けたといえる。

4. マルチエスニック・ネイバーフッドとしての大和市 M 地区の性格に関する若干の考察

これらの事例から言える範囲で、大和市M地区のマルチエスニックネイバーフッドとしての特徴について若干のまとめをしておきたい。

4.1 家族で訪れる人々のネットワークと質のよい情報交換の場としての教会

外国籍住民にとって、教会は安心できる場所であり、母語で交流でき、必要な情報が得られ、日本でのストレスや家族の問題について相談できる場所でもあり、特にM地区の“コミュニティセンター”としての役割を担っていた。教会に通う日系人たちが、国際交流協会や行政の相談窓口に行かなくてもよい理由がここにある。

教会には、様々な職業や階層の人々が訪れる。問題やトラブルに遭遇した際には、教会内部のネットワークを使って解決にあたっている。このネットワークを通じて、安い家賃のアパート情報が伝わったり、仕事の紹介や、外国人枠のある高校に関する情報などが獲得される。このように、教会のソーシャルサポートネットワークが教会に通う日系人たちの日本での適応に有効に働いている。

エスニックレストランやエスニック居酒屋に比べると、教会では、比較的信頼できる情報の提供がなされているといわれる。

「ペルーレストランやお店とかでもある程度、情報は得られるけど、教会で聞くのが一番安心だね。信頼できるというか。ほら、レストランとかは、よくない人もいるし、あまり付き合いたくない人もいるからね」（日系ペルー人、男性、40代）

1990年に入管法が改正されてからすでに25年以上が経過し、日本生まれの日系ブラジル・ペルー人の子供たちが多数存在する状況下にある。教会にも多くの子供たちがくる。

「私たちの子供たちは普段、日本の学校に通っているのですべて日本語の世界だし、日本人の価値観に囲まれている。週に1度はこの教会に来て、私たちの文化に触れさせないと（子供は）完全に日本人になってしまう」（日系ブラジル人、女性、40代）

筆者は注4で愛川町からM地区の教会に通った経験がある日系人女子大生の適応とエスニシティ経験について紹介したが、教会は「適応」に悩む人々の新しい形でのアイデンティティを模索する場所でもある。

4.2 「結節点」から見える「寛容性」の高さについて

結節点の事例2,3の雑貨店IやペルーレストランKの社会的世界に代表されるようにM地区のエスニックサバール性として多民族・多国籍性をあげることができる。そしてそれを媒介するのが雑貨店IやペルーレストランKであった。特に、F氏のインタビューで紹介したペルーレストランKのオーナーの場合のライフヒストリーや同レストランを利用する民族構成の多様さはその一つの象徴である。リ・ウェイは「エスノバール」の特徴の一つとして多民族、多文化、多言語、そして、多国籍という側面を描いているが（Li 2011）、この点は確かに県央地域の場合にも言えるのではないかと。

県央地域の場合のもう一つの特徴として、「寛容性」の高さもあげられるかもしれない。それは前述のように、この地区に難民定住促進センターがあったことに加えて、厚木基地の存在も大きい。すなわち、日常的に外国人と接してきた地域としての歴史性が、異質性を排除するという風潮を拒み、日常生活に共存のルールが埋め込まれているのかもしれない。この点もマルチエスニック・ネイバーフッドとしてのM地区が提起する神奈川県県央地域のエスノサバール性としての特徴の一つである。

4.3 地域のエスニシティ経験が生み出すエスニック・ビジネスの方向性

M地区の厚木基地との関わりや難民定住促進センターをめぐる地域のエスニシティ経験や多文化経験が寛容性の基層になっていることについてはI・Y氏のインタビュー調査で詳しく述べた。そしてそれは彼らのエスニック・ビジネスの展開にもつながっていると筆者は考える。ここでは難民たちのその後の地域への参与、適応、エスニック・ビジネスの展開について述べておきたい。それは、エスニック・ビジネスの観点から神奈川県県央地域の「エスニックサバール性」を考えるヒントになるかもしれない。

センターでの日本語支援と社会適応指導が修了し退所した難民たちは、市内で自動車の整備士、厚木市内のケーキ製造工場をはじめ、平塚市内のゴム会社勤務、リサイクル業等々をはじめた。また、オークションで中古バイクを購入し、それを母国で販売し、その利益で、会社を立ち上げた者もいる。中には帰化する人や、海外への技術指導、カンボジアでの通訳として採用された人もいる。さらには、エスニックビジネスを開始し、同胞にパクチー、空芯菜、調味料等の商品をトラックで販売したり、エスニック食材店を経営する人も出てきた。特に、ラオス人の多くはタイと言葉と食事が似ていることもあり、タイレストランをオープンさせる人もいた。これは、山下清海がいうところの移民エスニック集団の「借り傘戦略」と呼ばれるもので、彼らの適応戦略の一つでもあると筆者は考える。例えば、ネパール人によるインドレストラン経営や、中国人の台湾料理、海外では韓国人によるジャパニーズレストランなど、ホスト社会の中でよりメジャーで、人気のあるエスニック集団の姿を借りて、利益を増やそうとするビジネス形態である（山下2016）。

また、レストランだけでなく、「タイ」の看板を掲げ

てスナックやマッサージなどの水商売を始めたラオス人もいる。M 地区から鶴間駅周辺にはタイの店が多く立地するが、その中にはセンターを退所したラオス人も含まれている。さらに、同じ県央地域の愛川町にラオス文化センターができたことで、この戦略の可能性の広がりが見えた。筆者は考える。こうした地域としてのエスニシティ経験や寛容性が、エスニック・ビジネスの側面からみたエスノサバールとしての県央地域の特徴であるかもしれない。

5. 今後の研究に向けて

本論では、県央地域を“エスノサバール”とみなし、M 地区を、その一つの核をなすマルチエスニック・ネイバーフッドとして捉え、その「結び目」となる、教会、エスニックレストラン、エスニック雑貨店からそのマルチエスニックな社会的世界の一端を報告するとともに、M 地区の地域全体としてのエスニシティ経験や多文化経験の「基層」を見てきた。例えば、ペルーレストラン K では、同国人のみならず、同じ南米のコロンビア人、アルゼンチン人、スペイン語のわかる米軍基地関係者も多数出入りしていた。「結節点」の機能に注目してみると、食事、買い物、礼拝だけではなく、それらは情報収集の場であり、アイデンティティを確認する場であり、何よりも新たな関係が生まれる場でもあった。事例 3 では「結節点」であるエスニックレストランで、国籍を超えた新たなネットワークが作り出されていく様子が見てとれた。もちろん、地域のエスニシティ経験を背景にした寛容性や「共存」、「適応」の展開と同時に、差別やアイデンティティ形成の問題もある。こうした側面もエスニックサバールとして県央地域の実態であることを忘れてはならない。

まだネットワーク図は不完全であるが、大和市 M 地区の研究からエスニック・サバールとしての県央地域独特のエスニック・ビジネスの一つの形がみえてきたことで、他の県央地域の核的ネイバーフッドとしての厚木市や愛川町におけるエスニック・ビジネス及びエスニック・メディア、エスニック・スクールを軸にした社会的世界とのつながりが見えてきたというのが本論での結論である。

新宿大久保地区のようなインナーシティ型外国人集住地域ではなく（奥田・田嶋1993）、群馬県大泉町のような工業地域型外国人集住地域でもない、大都市圏郊外の中に形成されたマルチエスニックな世界として県央地域を捉える時の重要な論点になる。

＊本論は日本都市社会学会第34回大会自由報告部会Ⅲ（2016年9月4日）にて「神奈川県県央地域におけるマルチエスニックな社会的世界の形成」と題して自由報告したものに大幅な加筆修正をしたものである。

注

- 1) インターナショナルサロンとは、月に1回行政主催で開催される交流会であり、比較的多くの外国人が集まるので、防災教育の体験もなされる。
- 2) 例えば、Y カトリック教会では、直接、難民定住促進センターに支援はしていないが、教会を訪れた難民に対して情報提供の支援を数回行ったことがあるという。
- 3) これらの雑誌では、求人広告が大半を占めるが、その他に、各種手続きの仕方が紹介されている。例えば、銀行や郵便局の利用方法、不動産取得の方法、学校の手続きの仕方、状況や場面に応じた日本語の解説などが掲載されている。また、地震や集中豪雨をはじめとした災害や防災に関する事柄のみならず、旅行情報等、各地の内容が充実している。勿論、法律相談、携帯電話会社、衣料品店、食料品店、美容院、マッサージ店などの連絡先も掲載され、エスニックビジネスが盛んな様子が窺える。
- 4) ちなみに、以前教会に通っており、大学に進学した日系人1.5世代の若者たちから見る、もう一つの県央地区のエスノサバールとしての実態について補論的に付け加えておきたい。都内の私立 O 大学に通う二名の日系人大学生の場合である。一人は家族とともに9歳の時に来日した日系ペルー人の女性で、私立大学3年生 K.S、もう一人は、同じく家族とともに10歳の時に来日した日系ブラジル人の女性で、同じ私立大学2年生の N.M である。両家族は出稼ぎの目的で日本にやってきた。現在は神奈川県県央地域で家族とともに暮らしている。二人から来日当初のことや普段の生活について話を聞いた。

<K.S の場合>

K.S の家族は、父、母、弟の4人家族である。日本に来る前には、まずペルーからブラジルに行き、日本に来てからは、しばらく九州で生活し、父親の仕事のために富山県に移り、その後神奈川県にやってきた。神奈川では、知り合いを頼って、伊勢原市に住むことになった。現在は愛川町に住宅を購入している。

「日本に来たときは大変でしたよ。特に、伊勢原市の N 小学校に通うことになったんですけど、それは悲惨でした。その学校には外国人が全くいませんでした。私は外見がこの通りまったくの日本人ですので、まわりが、なんであいつは日本語がしゃべれないんだって。先生たちもすごく冷たくて。私は2年間、まったく誰とも口を利かず、笑ったりすることもなかった。いつだったか、教員と親との面談の時に担任の先生が、私の母親に、あなたの子供は感情がなくて様子がおかしいから、精神科でみてもらったほうがよいと言います。そうしたら、母親がすごく怒って、こんな学校やめようと、転校する

ことになったんですよ。転校先は愛川町にあるN小学校でした。そこは外国人の子供がたくさんいて、給食にペルー料理が出たり、外国語で挨拶の仕方を学んだりとかすごく楽しかったです」

このように、K.S.の家族は出稼ぎのために、ブラジルを経由し、国内移動を経て、神奈川で落ち着くことになるが、初めに待っていたのは学校でのつらい経験であった。ただし、K.S.の場合、愛川町のN小学校のように同国及び日系の子どもの多いところで、次第に勉強にも興味を持つようになっていく。

その後、K.S.は中学、高校を地元の愛川町で過ごす。高校にいた外国人生徒の多くは中退してしまったという。I高校では、大学に進学する者はごく少数で、ほとんどが途中でドロップアウトしてしまうことになるという。なかには、学費ローンを組んでまで大学に行く意味がわからないと親から言われた友人もいたとのことである。

K.S.は日本語に関してはほとんど自由に聞いたり、読んだり、話したりすることができる。K.S.の父親は派遣社員として車の部品工場で働き、母親はパートで工場で働いている。両親は母国では教員であったものの、日本語がわからないので、高校生の時に、親に進学の相談ができなかった。

「私の両親はペルーで教員をしましたので、勉強することに対しては非常に前向きで、日本の大学にもいけて。けれども、両親とも日本語がわからないので、進学の相談もすることができず、学校で聞いたり、自分でいろいろ調べるしかなかったですね」

K.S.の家族の普段の生活はどのようなものなのであろうか。聞き取りによると、家族でペルーレストランに行ったり、エスニック施設を利用することはまったくなく、買い物は近所のスーパーでし、日本の食材をアレンジして、ペルー料理を作って食べているという。以前は、大和市にあるカトリック教会のスペイン語ミサに家族で毎週日曜日に通っていたが、現在は行かなくなったという。その理由は、K.S.が地元のドラッグストアとゲーム販売店でのアルバイトが忙しかったからである。たまに友人たちと遊びに出かけたりするが、ペルー人や日本人の友人よりも、外国にルーツを持つほかの国の友人たちとの付き合いが多いという。近所にペルーの家族が住んでいるが、かわりたくないペルー人もいるし、特に仕事の話はしないようにしている。

大学教員の勧めで、フィリピンのスタディツアーに参加したことがきっかけで、国際協力に関心を持ち、将来はその方向に進んでいくことができると考えている。現在の悩みは、国籍の選択をどうするか迷っていることであるという。

<N.M.の場合>

N.M.の祖父は1940年に福島県からブラジルのパラナ州に移住した。N.M.の母親は1995年に、父親は2003年に出稼ぎ目的で来日してから神奈川県で生活している。父、

母、弟の4人家族で、家ではポルトガル語を話しているが、弟とは日本語で話すという。外見は日本人らしくないので、日本語を流暢に話すと驚かれることが多い。家族でブラジルレストランに行ったり、ブラジル食材店で買い物したりすることはほとんどない。車を所有していないので、自転車で行かれる近所のスーパーで買い物している。フェイジョアードをたまに作ることもあるが、家の食事はパスタが多いと話す。

以前は、大和市にあるプロテスタント教会（ポルトガル語ミサ）に一人で参加していたが、現在は大学の勉強やアルバイトが忙しくなり、行かなくなってしまった。

父親と母親は工場で肉体労働をしている。日本での滞在期間は長いにもかかわらず、二人とも日本語は聞くことがやつのことのできるくらいで、読んだり、書いたり、話すことができない。家では、インターネットでみることができるポルトガル語の新聞を読み、日本で発行されるポルトガル語の情報誌を定期購読している。ブラジルにいる友人たちとはフェイスブック等を使って連絡をとっている。母親は毎月、五反田にあるブラジル銀行で送金もしている。ブラジルの商品を販売するトラックが家の近くにやってくるので、ポルトガル語のCDやDVDを買うこともある。ブラジルのチャンネルを視たりもする。

N.M.は10歳で来日してから学校でいじめにあうことはなかったが、ハーフと馬鹿にされるのが嫌だったので、小学校、中学校、高校ではがむしゃらに勉強したという。英語を学ぶために塾にも通った。知り合いの家庭教師に勉強をみてもらうこともあった。また、国際交流協会の学習補習教室にも顔を出すようになり、そこで働いていたブラジル人女性スタッフにあこがれて、自分もその人になりたいと思うようになり、ますます勉強するようになったという。現在、大学では、多文化共生社会論と日本語教育学に興味を持って勉強をしている。

「私の家は結構厳しかったですね。親からは土日は家族の時間と言われて、遊び歩くこともなかった。夜は家にいないといけなかったし」

「最近思うことは、私は日本人でもないし、大学では、留学生でもない。日本で育ったブラジル人のハーフだってことですかね。それと、時々、話をしてて、言葉が出てこないことがあります。これからもしっかりと勉強を続けていかないと、セミリングルになっちゃいそうで。ちなみに、まわりの友人たちは、結構変なポルトガル語を話してますよ。言葉が咄嗟に出てこないものだから、そのとき思い浮かんだ日本語や英語がミックスしたポルトガル語です」

N.M.の現在の心配ごとや悩みは家族のことであるという。両親の不安定な仕事がとても心配で、いずれ他の外国人、例えば、中国人やフィリピン人に仕事を取られてしまうのではないかと心配している。さらには、弟が、日本語しかできないために、両親とのコミュニケーションが取れないことがすごく困っていることだと話す。

文献

- 『朝日新聞』朝刊 1980 2月25日付
- Alba, Richard D., John R. Logan, and Kyle Crowder. 1997. "White Neighborhoods and Assimilation: The Greater New York Region, 1980–1990." *Social Forces* 75
- Certeau, M, 1980, *ART DE FAIRE* = 山田登世子訳, 1987, 『日常実践のポイエティック』国分社
- Cressey, P, 1932, *The Taxi-Dance Hall* The University of Chicago Press
- 藤原法子, 1996, 「外国人児童生徒の生活世界と都市施設」広田康生編『多文化主義と多文化教育』明石書店
- 藤原法子, 1998, 「国境を超える女性たちの生き方と地域の相互扶助的関係に関する一考察」『日本都市社会学会年報16号』
- 藤原法子, 2008, 『トランスローカル・コミュニティ—越境する子ども・家族・女性／エスニック・スクール』ハーベスト社
- 藤原法子, 2010, 「外国につながる若者・子どもの生き方」渡戸一郎・井沢泰樹編『多民族社会・日本』明石書店
- 広田康生・藤原法子, 1993, 「ある調査の記録 フィールド日誌に見る鶴見の日系人世界」『専修大学社会科学研究所月報』358号
- 広田康生, 1997, 『エスニシティと都市』有信堂
- 広田康生, 2003, 『新版 エスニシティと都市』有信堂
- 広田康生, 2016, 「認識論及び方法論」広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ』ハーベスト社
- 『神奈川新聞』朝刊 1987 10月24日付
- 神奈川大学人文学研究所, 2008, 『在日外国人と日本社会のグローバル化』御茶の水書房
- 鐘ヶ江晴彦編, 2001, 『外国人労働者の人権と地域社会』明石書店
- 宮島喬編, 2000, 『外国人市民と政治参加』有信堂
- 奥田道大・田嶋淳子, 1993, 『新宿のアジア系外国人』めこん
- Short, J, Jr (ed), 1971, *The Social Fabric of the Metropolis: Contributions of the Chicago School of Urban Sociology*, The University of Chicago Press
- Wei, Li, 1997, *Ethnoburb versus Chinatown: Two types of Urban Ethnic communities in Los Angeles*, Cybergeog ; European
- Wei, Li, 1998, *Anatomy of a New Ethnic Settlement: The Chinese Ethnoburb in Los Angeles* Urban Studies Vol.35
- Wei, Li, 2011, *Ethnoburb The New Ethnic Community In Urban America* University of Hawaii Press
- 山下清海編, 2016, 『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会』明石書店
- 大和市役所管理部庶務課編『大和市史』近現代 下 1994
- 『読売新聞』朝刊 1990 1月13日付